

孤みなしこの嬢女をみなくわんおむ觀音あかがねの銅みかたの像よりうやまを憑敬あやひて奇しるししき表あらはを示し現げん

飯を賜へ」といふ。妻言はく「今進らむ」といふ。竈に燃火を起して、空しき竈を居ゑ、頬を押して蹲る。空しき屋に入りて徘徊りて大に嘔き、口を嗽き手を洒ひ、堂の内に参入りて像に繋けたる縄を引き、涕泣きて白して言さく「恥を受けしむることなかれ。我れに急に財を施へ」とまうす。罷り出でて、先の如く空しき竈戸に向ひて頬を押して蹲る。爰に日の申時に急に門を叩きて人を喚ぶ。出でて見れば、隣の富める家の乳母有り。大櫃に百の味の飲食を具納れ、美き味芬馥しく、具らぬ物無くして、器はみな碗と碟子となり。すなはち与へて言はく「客人有りと聞く。故に隣の大なる家具けて物を進納る。ただし器は後に給へ」といふ。嬢大に歓喜び、幸の心に勝へず、著たる黒き衣を脱ぎて使に与へて言はく「物の献るべき無し。ただし垢つける衣のみ有り。幸はくは受け用よ」といふ。使の母取りて著、急々に還り去ぬ。食を以ちて夫に饗すれば、食を見て怪び、彼の食を見ずしてなほ妻の面を瞻る。明日夫去ぬ。絹十疋と米十俵とを以ちて、妻に送りて言はく「絹は臈に衣被に縫ひ、米は急に酒に作れ」といふ。嬢彼の富める家に往きて幸の心を述べて慶び貴ぶ。隣の家室曰はく「癡なる嬢子かな。もし鬼託くや。我れは知らず」といふ。彼の使なほ言はく「我れまた知らず」といふ。嘖められて家に帰

り、常の如く礼まむとして堂に入りて見れば、使に著せたる黒き衣、銅の像に被る。爾うしてすなはち観音の示す所なりと知る。因りて因果を信ひ、ますます慇懃に彼の像を恭敬ふ。此れより以来、本の大なる富を得、飢を脱れて愁無し。夫妻天になること無く、命を全くし身を存つ。斯れ奇異しき事なり。

法師を打ちて現に悪しき病を得て死ぬる縁 第三十五

宇運王は、天骨邪見にして三宝を信はず。聖武天皇の御世に、是の王縁有りて山背に徘徊る。八人従ひて奈良京に向ふ。時に下毛野寺の沙門諦鏡奈良京より山背に往き綴喜郡を歩く。師率に王に値ひて避け退く所無く、笠を傾け面を匿して路の側に立つ。彼の王見て、馬を留め刑たしむ。師弟子と水田に入りて逃げ避れ走る。なほ強ひて追ひ打つ。師の負ひ持てる蔵、みな撃たれて破れ損はる。時に法師呼びて曰はく「爰ぞ護法無からむ」といふ。王去ること遠からずして、其の路中に儼に重き病を受く。高き声をもちて叫び呻ひ、地を踊離ること二三尺ばかりなり。従者状を知りて法師を勧請ふ。師否びて受けず。三遍請ふれどもなほ終に受けず。問ひて曰はく「病むか」といふ。答へて

れることが多い。説話展開のうえでの伏線となつてゐる。三たわむれる。三男は雨に妨げられて帰ることができない。

一本説話では、男が「大」と表現される時に女も「妻」と表現される。

二底本文に「竈」、国会図書館本訓釈に「竈へ余倍乎」とある。しかし、「竈」も「なべ」も、水を加えて熱して煮炊きするための器であり、蒸すための器ではない。蒸すための器は「甑」である。「竈」は「甑」の異体字「甑」の誤写か。当時、飯は米を煮てつくつた。「甑」音勝、古之岐、炊飯器也（和名抄）。三頬杖をついて、頬を手で支えるのが「頬杖」、あごを手で支えるのが「うら杖」。四原文「繫る像引繩」。

五わたしを恥ずかしめにあわせないでほしい。六観音に一度祈願してからは、この主人公は泣かない。ひたすら待つ。観音の救済を確信した姿が描かれる。七午後三時から五時のころ。

八類似した説話展開をみせる中巻十四縁にも「乳母」が登場している。本説話の「乳母」は、乳母であることの意味がきらかではない。観音が乳母に身を変じていたとされるのは、観音を女性と考えたか。観音を美女として崇拜する傾向は六朝末からみられるが、唐宋以後ますます盛んになった（小林太市郎）。

九この飲食が仏前にささげられた供物であったことを暗示するか。主人公は貧窮に苦しんでゐるのだから、供物は主人公のささげたものではない。父母のささげたものであろう。上文には「安」彼像、以之供養とあった。中巻十四縁「〇」このような記述があるのはめずらしい。上文にみえるように、器は碗と碟子とであった。貴重品であらう。本説話では叙述を欠くが、器

を返却するために隣家を訪れる、という説話展開が本来のかたちか。

二「正」は、布をはかる単位。絹一疋は、賦役令によれば長五丈一尺、幅二尺二寸。

三一俵の容量は不明。公私の運米は五斗を一俵とし三俵を二駄とした（延喜式・雜式）。

四鬼が憑いたのか。

五乳母。上文に「使」使母とあった。

六衣は、観音の靈験の証拠となつてゐる。

七上文には「父母有時、多饒富財」とあった。七若死にすることなく。

第三十五縁 宇運王の病死を因果の理によつて説明する。

六宇治王。天平九年（宝七）九月、従五位下。天平九年十二月に内蔵頭、天平十年（宝八）閏七月に刑部大輔、十二月に中務大輔（統紀）。

七元未詳。邨岡良弼は、城上郡下野郷の竹林寺を擬している。竹林寺は奈良県桜井市大字笠に所在。一名笠寺。「笠」にかかわる本説話の存在は、笠寺を擬することの正しさを予想させるが、「奈良京下毛野寺」（中巻二十六縁）には合致しない。三〇未詳。本説話以外に所伝をみない。

三京都府八幡市、城陽市、綴喜郡のあたり。三令集解・僧尼令には、道路で僧尼が俗人に出会つたばあいの規定がみえる。騎乗の僧尼が三位以上の者に出会つたならば僧尼は身を隠さなければならぬ。身を隠す場所が無いばあいは、馬を止めて路側に立たなければならぬ。騎乗の僧尼が五位以上の者に出会つたならば僧尼は馬を止めて揖（うやむ）して通過しなければならぬ。僧尼が歩行のばあいは僧尼は身を隠さなければならぬ。僧尼が歩行のばあいは、身を隠す場所が無いばあいの規定は判然としな